

高知動物慰霊管理センター ～人々に訴えかけるメッセージ～

高知工科大学システム工学群建築・都市デザイン専攻

指導教員 吉田 晋

1170008 石川 達也

1. はじめに

ペットブームという言葉が最近耳にするようになった。その言葉は現在日常会話のひとつとして定着し、それに関する映像をSNS やテレビでは見ない日はないほどのブームとなっている。

しかし、そのペットブームの裏では人間の身勝手な理由により、毎年多くの犬猫が殺処分されている。さらに高知県は人口当たりの犬猫の殺処分頭数の統計において、10年以上全国ワーストを競っている現状がある。(図1. 表1) この現状を建築でどうにか解決することはできないか。そう思い今回のテーマに取り組んだ。

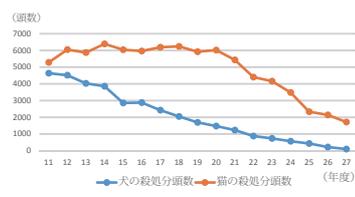


図1 高知県における年度ごとの犬・猫殺処分頭数

表1. 人口1万人当たりの殺処分頭数 (平成26年)

犬猫		猫のみ	
1位香川県	39.68頭	1位高知県	28.03頭
2位長崎県	34.42頭	2位長崎県	27.15頭
3位山口県	32.27頭	3位山口県	23.97頭
4位高知県	30.86頭	4位愛媛県	23.07頭

2. 対象敷地

対象敷地は、高知県香美市土佐山田町楠目町に位置し、私が通う高知工科大学から直線距離で約1kmの距離にある。(写真1)そこは国道195号線に面し、(写真2)工科大生の通学路でもある。近辺には鏡野公園、小学校、さらには龍河洞、アンパンマンミュージアムといった観光地も点在することから交通量が多い。

敷地は数年前まで桑畑として、高知工科大学の島村研究室ホログラフィ研究対策本部として利用されていた。現在は人工的に造られた石垣、棚田、古びた建物といったかつての面影を残しつつも雑草の生い茂る殺風景となっている。(写真3)

また敷地東側には1級河川の物部川が流れ、北側には山がそびえ、自然に囲まれた場所である。さらに敷地内の標高が50m～70mと高いため、見晴らしも良く、地震等の災害時の避難場所にもなり得る。(写真4)



写真1



写真2



写真3



写真4

3. 調査

調査として以下の3施設の訪問に加え、講演会にも参加した。

- ・高知県小動物管理センター (7月20日)
- ・愛媛県動物愛護センター (8月27日)
- ・徳島動物愛護管理センター (9月14日)
- ・ペット乗り越える災害について (9月19日)

この施設訪問、講演会から気付いた点、問題の抽出を行う。

まずは施設の立地である。3施設とも山奥に位置し、そこを目的とした人のみが訪れるだけで、人々の生活圏内から隔離されている。それは犬猫の騒音等で近隣住人からの苦情を懸念してのことでもあるが、立地が軽い気持ちでペットを飼う人の増加を加速させている要因のひとつとなっていることは否めない。またそれがイベント日以外の来場者数の少なさという問題にもつながる。

次に収容施設の配置である。その施設が敷地内の奥に配置されていることで、多くの犬猫が収容されている事実を確認しづらい。また収容施設内の空間が閉鎖的であり、犬猫目線で考えられていないと感じた。人間が人間らしく生きられる設計があるのなら犬猫も犬猫らしく生きられる設計が必要である。

講演会では多くのペット飼育者が参加しており、ペットを家族の一員として捉える人々の熱意を感じることができ、ペットと飼い主のための災害避難所の提案は急務であると感じた。

4. 調査から見えた方針

3の調査を通して本設計の方針を定める。

ペットブームである近年において、ペットを家族の一員として捉える人々が増加しているのは確かなのだが、その一方で、適正飼育の知識、終生飼養の覚悟のないままにペットを飼う人々もいる。そのため、どんなに収容能力のある施設を新設したとしても、人々の意識が変化しない限り、施設が飽和状態となり殺処分せざるを得なくなるのは時間の問題である。よって収容能力のある建築物を設計し、問題解決を図るのではなく、建築物により人を導き、意識を変えるきっかけを与える建築物の設計を目指す。

以上のことから方針を

「ペット飼育者をはじめとする人々の意識改革」とする。

方針の具体的なプランを以下に記す。

動物愛護管理センターを提案するとなると、さまざまな機能を持った施設が必要である。

例えば、収容施設、ドッグラン、ふれあい広場…等。それらの空間にはそれぞれの役割があり色がある。そして、その色は「陰」と「陽」の大きく2つに分けることができる。(図2)



図2

図2にある「陽」の施設。それは犬猫に興味のある人にとって名前を聞くだけでもわくわくするような場所ではないだろうか。そのような空間をメインとした施設を提案すれば、多くの来場者が訪れるのは容易に想像できる。

はたしてそれでよいのだろうか。

確かに訪れた人々はその空間を堪能し、満足出来るのかもしれない。しかし、それでは今回の方針に沿うものではない。「陽」をメインとした施設づくりを行うと、もちろん人々ははその「陽」しか見ない。そしてそこで犬猫の「かわいい」「癒し」のみを経験することとなる。そうすると適正飼育の知識・終生飼養の覚悟が置き去りとなり、感情のみが先走ってしまう。

そこで「陰」とされる収容施設、慰霊塔、霊園をメインとすることで、普段目を背けがちな自然の摂理に目を向け、「生きること」の意味を考えるきっかけをつくる。それにより動物愛護の本質を理解し、「家族の一員として」迎え入れる覚悟を持つことで意識を改革してほしい。

下の図は現状の悪い流れと、提案施設建設後の理想の流れである。

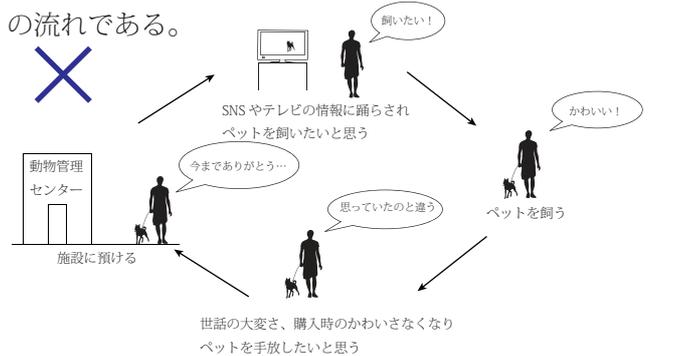


図3

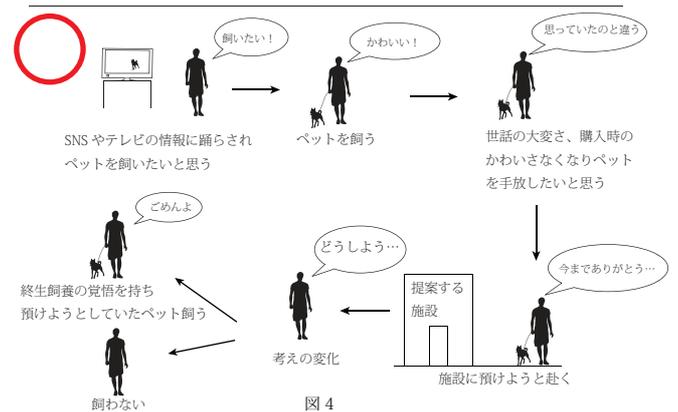


図4

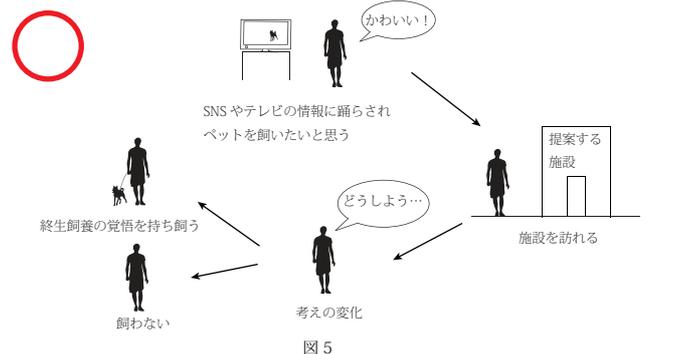


図5

5. 提案内容

5-1 全体構成

下の2枚の写真は全体配置図と全体正面図である。全世代から親しまれるようシンプルな施設配置と外観を目指した。

以下各施設の提案内容を記す。

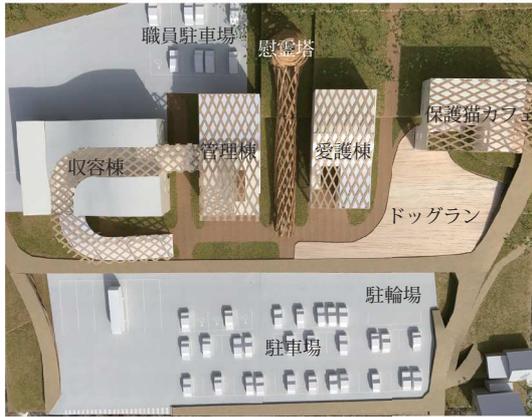


写真5 全体配置



写真6 全体正面



図8

複数人が慰霊塔内部に入ることが出来る広さにすることで家族の一員であった慰霊対象のペットとともに皆で同じ時間・空間を共有。(図8)

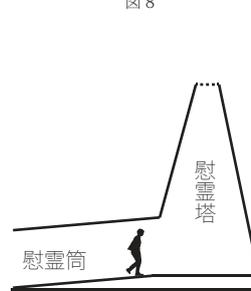


図9

慰霊塔までに傾斜のある慰霊筒をつくることで、動物への畏敬の念を呼び覚まし、上昇感によりあの世に近づく感覚を味わうことができる。(図9)

以上のプロセスからできた慰霊塔の模型写真が下の2枚である。



写真7 慰霊塔の中から上空を眺める



写真8 慰霊塔

5-2 慰霊塔

まず慰霊塔のプロセスを説明する。

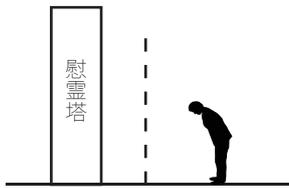


図6 慰霊塔と人の関係

現在の慰霊塔と人の関係は左図のようになっており、慰霊塔と人に見えない壁が存在する。(図6)



図7

その見えない壁を取り払い、人が慰霊塔内部に入ることが出来る空間をつくることで慰霊対象となる動物と一体化する感覚を味わう。(図7)

慰霊塔はこの施設のシンボルである。人々から視認され、犬猫のみならず動物、さらには生命体に対し畏敬の念を抱くきっかけを与える。

この慰霊塔は固く冷たい石碑ではなく、温かく柔らかいイメージを持つ木材を使用している。そして人々はその木の間から差し込む光、通り抜ける風、生い茂る緑を感じられる。それは生命は自然(大地)に還るという考えの下、「内部でありながら外部を感じさせる」空間づくりを目指した結果である。

また先が行き止まりとなっているのは写真7にもあるように視線を上空に誘引するためであり、そこにいる人々全員が同一方向(上空)を向く光景は、慰霊碑らしさを創出させるとともに半径4.5mの空間を異次元空間へと変貌させる。

5-3 収容棟

この棟は高知県全域で保護された、また飼い主から引き受けた犬猫を収容、処分する役割を持ち、犬猫、職員、来場者が利用する施設である。

高知県は犬に比べて猫の保護頭数が圧倒的に多いため、立体的な動きができるよう縦にも横にもスペースを確保した。また子犬・成犬・老犬・子猫・成猫・老猫といった体温の違う各年代別の部屋を用意し、犬猫らしく生きられるような設計を心がけた。

3の調査から問題として取り上げた収容施設の配置については、収容棟にアクセスしやすいよう、大きなスロープを建物の中を貫通させ、そのスロープの終着点をホール・リハビリ訓練所とした。そうすることで人々に日常的に利用してもらい、収容棟がより身近に感じられる。



写真9 収容棟

5-4 管理棟

この棟は主に職員が利用する施設である。

1階は負傷動物や病気を持って保護された犬猫を治療するための諸室を配置。2階の職員室は収容棟の職員室と空中通路でつながっており、各棟の休憩所として、また事務間の連携・コミュニケーションを図り、災害時にも迅速な対応を実現させる。3階も収容棟と連結している。その終着点にホール・リハビリ訓練所がある。そして1階の待合室・ピロティ、3階の各室は災害時に2階の職員室と連携をとりながらペットと飼育者専用の避難所に機能転換する。



写真10 管理棟

5-5 愛護棟

この棟は動物愛護精神の浸透に向けて、講演会やイベントが行えるよう大ホール・展示室等があり、管理棟とは対照的に来場者が利用する施設である。

1階正面をエントランス・吹き抜けの圧迫感のない開放的な造りで来場者を心地よく迎え、室内飼い推奨室を入り口付近に配置することで来場者に視覚的に訴えかける。

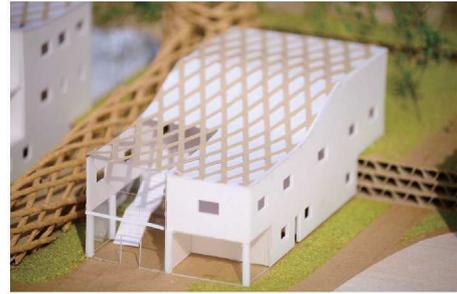


写真11 愛護棟

5-6 保護猫カフェ

名前の通りここにいる猫は高知県で保護された猫である。客が気に入り、終生飼養の覚悟があれば、その猫は譲渡されるという里親探しを兼ねたカフェである。

1階は「内部でありながら外部を感じさせる」造りになっている。また猫らしく生きられるよう吹き抜けを利用し、高低差のある設計とした。

この保護猫カフェは施設の日常化を目指すためににもいい効果を発揮する。



写真12 保護猫カフェ

6. まとめ

本設計では建築的な仕掛けによる人々の意識改革を促すよう努めてきた。また犬猫らしく生きられる設計、ペットと飼い主専用の災害避難の拠点となるような空間を提案した。これらによりペットを家族の一員として捉える人が増加し、最終的にこのような施設が不用となることが理想である。